

笑顔と髑髏／小林千夏さん

塔の中に積み上がった髑髏は綺麗に整頓され、球を失った底の無い穴だけがじつとこちらをみつめていた。塔の高さは五十メートルほどもある。その高さにびっしりと、すぎ間無く埋め尽くされた髑髏。

各個体に大きな差など見られない。本来は、その頭の持ち主それぞれが尊重されるべき、愛すべき一人一人の人間だったはずだが、その陰りなどみじんも見えない。比べてみる気も起こらない。死んでしまえば皆同じなのだという悲しい定文句はまっけてしまう。綺麗ごとなど、挟み込む余裕も無い。そこに積み重なっているのはただ虚ろで、希望の無い髑髏達だった。

カンボジアのチュンエク大量虐殺センターで私が見た光景だ。あまりに多くの人が殺された処刑場跡であるその場所は、全ての遺骨がまだ発掘されきれておらず、

敷地内を歩いていると至る所から骨片が空を仰いでいるのにぶちあたる。その度に気管をぎゅっと握りつぶされたような苦しさが胸に詰まった。

こんな場所が、カンボジアには三百力所以上もあるという。私は心のどこかで、第二次世界大戦以降、世界は平和に向かって収束しているのだと、あぐらをかいていたのだと思う。だが、カンボジアで起こった大量虐殺の出来事は、ほんの二十年前、自分が既に生まれている時代の出来事だ。世界平和はまだまだ遠いのだという現実を突きつけられる。

心臓がドカッと木槌で殴られたような思いをどついたらいいのかわからず、追いつめるようにしてもう一カ所、シエムリアップの処刑場跡を訪れた。処刑場跡は小規模な慰霊所となっていた。五メートルほどの高さの小さな慰霊塔が真ん中にあり、バラバラと骨が積み入れられている。隣接している小さな公園と慰霊所の間に明確なしきりは無く、幼稚園生くらいの小さな子供達がそこでボール遊びをしていた。

子供達が、すぐ隣の塔に入っているものが何を意味するのかを知らないとは思えない。わかっているながら、隣にあるのが当たり前のものになっているのだらう。やせ細った体にポロポロの服をまとい、やはりポロポロのボールを追いかけ、真っ黒な裸足で走る子供達は、目からほったから、こぼれ落ちそうなくらい大きな笑顔で遊んでいる。私とその子供達の価値観は違うのだから、哀れに思うのが間

違いであるということはわかっている。それでも、祖国の休日、近所のマクドナルドでニンテンドーDSを抱えてわがまま放題の大騒ぎをしている日本の子供達の姿を思うと違和感を覚え、彼らの所帯の一ヶ月分の生活費の十倍以上のお金を払って、娯楽の旅行をしている自分の立場を思うと罪に近い意識が重くのしかかった。

祖国の日本で私は今、一丁関連の仕事をしている。とても好きな仕事だ。ファッションの学校からコールセンター業、二エンジニア、ドバイでのホテル業、飲食業など、様々な業務や経験を経てきた末に結局自分に一番あっている仕事だと思い、二十代の後半に差し掛かった時に、今後はこれ一本でやっていこうと決意して就いた仕事だ。休暇が取れば旅に出る。新しい物に触れ合っって冒険をし、心にぎゅゅと栄養を詰める。

でも、処刑場跡からの帰り道、トゥクトゥクに揺られながら、私は始めて、自分のでしていることの全てが酷く空虚で身勝手に思えた。例えば、私の構築しているネットワークの機器が爆発したり、設定を間違えてしまった所で、だから何だと言うのだから。ネットワークが繋がらなくなる、顧客に迷惑がかかる、だから何だと言うのか。このカンボジア旅行にはいくらかかっただろう。例えば一度の旅行を我慢していたしたら、そのお金で、本当は私は何人の人の命を救うことが出来たのだろう。積み上がった罇、慰霊塔の隣で見た子供の笑顔、路上にいる片足の無い

乞食の少女、大地震があれば一瞬で崩壊してしまいそうな大規模なスラム、そこから顔をのぞかせる住人達と目があつた時に見せた彼らの大きな笑顔。

私は、世界の為に何もしていない。今、私がしていることは全て、自分の為。それが酷くむなしかった。そして、自分の為の事は、もう十分ではないかと思えた。そろそろ三十歳になるうとしている今、自分だけの為より、誰かの為に何かをする年齢になってきているのだから。

ただ、生まれた場所が違うだけで、こんな大きな違いがあつていいはずが無い。偶然の運で、私は日本人に生まれ、そしてもう十分な恩恵を受けた。ならば今こそ、自分が受けた恩恵を世界に返すときではないか。そんな事を考えた。そして何より強く思ったことがある、その言葉が心に出た瞬間、ぱーんと、頭の中がクリアになった。

それは、子供達に、もっといい未来をあげたい、ということ。

子供達が、罇の広場の隣ではなく、もっと広い公園で遊べるように。ポロポロの足の擦り傷が少しでも少なくなるように。もっと貧しくて、遊ぶことも出来ない子供達もみな、あの笑顔を中心に持つことが出来るように。四肢の一部が欠けた罪なき子供がこれ以上出ないように。この子供達が大人になった時にも「世界平和」が、ただの遠い日の幻のままであることがないように。

世話好きであっても、決して子供好きではない自分がそんな風に感じたことに自分で自分に驚いた。そういう愛は、自分にはないと思っていた。人に愛されて、支えられて生きてきた人生の経験が私に、自分のような人間にも世界を救う力になれるだろうという力と自信を与えたのだと思う。

まずは小さいことからでもいい。兎に角始めよう。後から規模を大きくすればいい。そう思って一番始めに考えたのが、カンボジアの、かものはしというNGOが職業支援をしている現地の女性が作った雑貨を会社で販売することだった。カンボジアで、NGOの人とお話をする機会を得たのがきっかけだ。

大好きな会社と自分のやりたいボランティア活動をつなげたらどうかと考えたのだ。自分の好きな物を何も諦めずにやりたいことが出来たら、きっとそれが一番の継続性を持ち、また強い力を発揮する物になる。会社の規模を考えると一回の販売で、収益はせいぜい五万円程度だろう。でも、問題はお金だけではなく、この機会に多くの人に今私を持っている思いを知ってもらいたいと思った。

実施の可否を相談すべく、上司に相談をした。多少無茶な事でも、やらせてくれることの多い会社だ。まあ、ノーとは言われないうらう。そう思って臨んだが、私の上司の意見は私の予想だになかったことだった。

それは、その五万円で、結局世界の何が変わるのか、だ。

ただ一回、イベント的に五万円を徴収し、確かにそのお金は役に立つのだろう。でも、それで社員の意識に定着するほど、人の意識は簡単には変わらないのだ。逆に、物品を買って、これで支援になっただろう、という半端な意識が定着するリスクさえある。どうせやるなら、始めから五万円の収益をあげることが目的にするのではなく、もっと大きい目標を立てて、本当に誰かを助けられる何かを考えよう。それが彼の意見だった。

会社と社会貢献を繋げるのであれば、どちらにもメリットを生むことも考慮しないといけない。また、新しい試みを私が会社で主導することになると、きっと私はこの先に何百回も、社員や知合いに同じ説明をすることになる。何故誰も知らないどこかの誰かを、自分のお金を犠牲にして助けなくては行けないのか、何故、彼らなのか。何回同じ話をして、自分の情熱が尽きない方法と目的、対象を、もう一度見直して見なさい、と上司は私を諭した。上司の言葉に、また胸が熱くなる。情熱に任せるのではなく、本当に世界の助けになれるよう、一から向き合ってみようと思えた。

カンボジアから帰っていたのが今年の二月。それから今に至るまで、私はまだ、模索の日々を送っている。休みの日や空いている時間には、ボランティアのNGOを訪ねて話を聞いたり、一緒に作業をしたり、関連書籍を読んだりしている。進め

ば進むほどに、まだ自分が何も知らない事を知るばかりだが、その過程で出会ったポランティアの人の言葉が印象的だった。

「君が見た子供たちは、まだ、マシな方なんだ。君はまだ、その状況に遠く及ばない段階で苦しんでいる子供達を知らない。ポランティアは早く始めるに越したことは無い。でも、長期でやりたいと思っているなら、一度、君が本当に助けたい子供達が君がどういう状況にあるのか、見てみた方がいい」

世界ではまだまだカンボジアの悲劇に並ぶ凄惨な悲劇が次々に至る所で起きている。話を聞いているだけで滅入ってしまうような話ばかりだが、くじけそうになる私を、まだまだ踏み込みが甘いと叱責しながら励ましてくれる仲間も出来た。

私の試みはまだ大成しておらず、進行中である。まだ個人から会社へと、たすきを渡せていない。私個人は、どうも、マザーテレサにはなれそうもないし、テレビに出るような、誇り高きポランティア界の星にもなれそうにない。でも、私には、いつも私を助けてくれるすばらしい仲間がいる。

私個人から仲間へ。仲間から会社へ。どんどん輪を広げて、大きな力を作り出し、私に愛をくれたこの世界で、今、苦しんでいる人たちにできるだけ多くの恩返しをする。これが今の私の目標だ。

私の小さな力や思いが勝つのか、世界に溢れる不運が勝つのかはまだ、わからない。でも、私は、今のこの思いを決して絶やすまいと世界に誓う。そして、今、世界に挑戦を投げかける。平和というのは遠い幻の話なのか、この手につかめる物なのか。

さあ世界よ、答えを見せる。